

現代ギリシア語における 英語からの借用語について

関 本 至

I

その歴史において他のいかなる言語とも接触したことの無い言語などというものは考えられない。小部族の言語や方言より、大民族の言語、国語に至るまで、言語の歴史はその重要な一面として他言語との接触の歴史でもあった。そこには当然異言語間の相互影響が起る。語の借用であり、言語の混淆であり、基層・上層などの現象である。

こうした現象はいかなる時代のいかなる言語にも多かれ少なかれ見られるもので、ギリシア語もまたその例にもれない。歴史以前のギリシア語が地中海の先住民族の言語より *thalassa* (海), *dáphne* (月桂樹), *elaía* (オリーブ) 其他の語を借入したらしいことはすでに指摘されている通りである。また *á*lpha とか *bé*ta など文字の名称がギリシア文字それ自体とともに本来セム由来であることも周知の通りであって、古代のギリシア人もまた彼らが接した外異の諸民族から少なからぬ語をとり入れていたのである。

II

近代ギリシア語における外来語一般については、数年前の文学部紀要に拙論を発表したことがある。詳細についてはそれを見て頂きたいが、要旨の一部をここに摘記すると次のようになる。

現代ギリシアの言語学者 Andriotes 氏の「共通現代ギリシア語語源辞書」所収の全語集約 12,000 語の中、外来語が 2,700 語ある（すなわち全語彙の 22.5%）。その出自言語別の数は次のとおりである（但し、借用数が 10 語未満の言語はここでは省略した。ついでながら日本語からの借用語はキモノ、ミカド、ハラキリの 3 語であった）。

イタリヤ語	786	スラヴ語	62
トルコ語	740	アラブ語	23
フランス語	387	アルバニア語	19
ラテン語	334	スペイン語	17
ヴェネツィア語	157	セム語	11
英語	90		

この表によって明らかなように、ラテン語、イタリア語、ヴェネツィア語など、イタリア半島の言語からの借用語が圧倒的に多いが、このことは、ギリシアの歴史とその地理的位置を考えるならば容易に首肯できることであろう。またトルコ語よりの借用語が全借用語の27.4%に当たる740語という多数に及んでいることについて、あるいは驚きを感じる人がいるかもしれないが、ギリシア語がビザンティン帝国の滅亡した15世紀中葉より19世紀の初頭までトルコの支配下にあったことを思えば、むしろ当然すぎる現象であることが理解できるであろう。（なお、現代ギリシア語におけるトルコ語よりの借用語については昨年度の文学部紀要に小論を載せた）。ついでフランス語の多いことは、大陸（ヨーロッパ）におけるフランス語の影響力の大きさを示すものと言うべきであろうか。それに比して英語の90語はかなり見劣りのする数字である。これは大陸での英語の勢力がいかなるものであったかを示す一種のパロメーターであるかもしれないし、また同じヨーロッパではあるが、イギリスとギリシアの地理上および文化交流上の距離を思わしめるものであるかもしれない。

III

英語よりの借用語90語をその意味内容から部類分けすると次のようになる。（印刷の都合もあり、本稿ではギリシア語はラテン文字で記す。それも単なる転字ではなく、発音をうつした。この際、thは英語のthreeのthの音、dhは英語のtheyのthの音、ghは有声の喉の摩擦音、dzは英語のjudgeのjの音、tsはcatsのtsまたはcatchのtchの音を示す。なお左側はギリシア語で、右側は英語。“máts<match”は“ギリシア語mátsは英語matchより由来”の意味である。「」の中はその語の意味である。）

1. スポーツおよび各種の娯楽関係

gólf	<	golf	「ゴルフ」
kríket	<	cricket	「クリケット」
máts	<	match	「（フットボールなどの）試合」
bóks	<	box (ing)	「ボクシング」
spór	<	sport	「スポーツ」
ténis	<	tennis	「テニス」
dzókeis	<	jockey	「競馬の騎手」
futból	<	foot ball	「フットボール」
hókei	<	hockey	「ホッケー」

blófa	<	bluff	(トランプ遊びで自分の手を強いうように見せかけること)
brídz	<	bridge	(トランプ遊びの一種)
póker	<	poker	(全 上)
ramí	<	rummy	(全 上)
dzáz	<	jazz	「ジャズ」
kláum	<	clown	「道化」
klúb	<	club	「クラブ」
dánsing	<	dancing	「おどり」
skéts	<	sketch	「一幕ものの小品」
resítal	<	recital	「独奏会」

2. 飲食物関係

koktéil	<	cocktail	「カクテル」
kék	<	cake	「ケーキ」
uíski	<	whisky	「ウィスキー」
pónsi	<	punch	「ポンス」
rösbíf	<	roast-beef	「ロース焼の牛肉」
rúmi	<	rum	「ラム酒」
sánduits	<	sandwich	「サンドイッチ」
tséri	「チェリー酒」	<	cherry
tsíkla	<	chicle	「チクル」(チューインガムなどの原料)

3. 衣料関係

zérsei	}	<	jersey	(絹織物の一種)
dzérsei				
kábot	「下着の布」	<	cabot	
pizáma	<	pyjama	「パジャマ」	
pulóver	<	pull-over	「セーター」	
smókin	(衣服の一種)	<	smoking	
sórts	<	shorts	「半ズボン」	
tsíti	(織物の一種)	<	city	

4. 動植物

ararúti	<	arrow-root	「葛」
manitóba	(小麦の一種)	<	Manitoba
mandaríni	(ミカンの一種)	<	mandarin
maóni	<	mahogany	「マホガニ」
bultóg	<	bulldog	「ブルドッグ」
brík	「さけの卵」	<	brick
kárdif	(石炭の一種)	<	Kardif
kók	<	coke	「コークス」

5. 建造物, 機械, 道具の類

veránda	<	veranda	「ベランダ」
víntsi	<	winch	「巻上げ機」
klób	<	club	「警棒」
bríki	「軽舟の一種」	<	brig ?
dred not	<	dread nought	「大型戦艦」
ofís	<	office	「事務所」
revólver	<	revolver	「連発ピストル」
tánk	<	tank	「戦車」
tunéli	<	tunnel	「トンネル」
tramvai	<	tramway	「電車」
trolés	<	trolley	「トロッキ」
hól	<	hall	「ホール」

6. 人間(職業, 称号, 性格の名など)

dhandís	<	dandy	「しゃれ者」
lédhi	<	lady	
lórdhos	<	lord	
milédhi	<	my-lady	
milórdhos	<	my-lord	
mís	<	miss	
bébis	<	baby	

pólisman	politsmános	<	policeman
puritanós	<	puritan	「清教徒」
dzéntleman	<	gentleman	
seks-apíl	<	sex-appeal	
flért	<	flirt	「うわき」
hiúmor	<	humor	「ユーモア」

7 計 量 単 位

yárdha	<	yard	「ヤード」(長さ)
íntsa	<	inch	
kilovát	<	kilo-watt	
dholárió	<	dollar	「ドル」

8. そ の 他

klíring	<	clearing	
kongrésó	<	congress	
bár	「飲み屋」	<	bar
párti	<	party	「政党」
stóp	<	stop	「停止」その他
tabú	<	taboo	(もちろん本来はポリネシア語だが)
tést	<	test	
trást	<	trust	「企業合同」
tséki	<	cheque	「小切手」
flít	「殺虫剤の一種」	<	fleet

以上はすべて名詞であるが、このほか形容詞が2語 (snób「平凡な」<snob, と sókin「いかがわしい」<shocking), 動詞が1語 (boikotázo<boycott「ボイコットする」) ある。

これによって、およそいかなる種類の英語語集がギリシア語の中に入っているかがわかるであろう。

なお、名詞の性 (gender) が何であるかの問題、また借用に際しての音の移し方、あらわし方の問題、また意味の推移の問題などがあり、個々の語についてもそれぞれ検討吟味すべき事柄があり、扱うべきことは多いのであるが、ここではすべて省略する。

IV

上に述べた英語からの借用語 90 というのは Andriotes の語源書についてだけ見たものである。しかし他の辞書について見るならば数字はまた違って出てくる。

一般に借用語、とくにその数を論ずるには、実を言うと対象自体にふくまれる種々の困難性を顧慮する必要がある。すなわち、当該語が果して外来語であるかどうかの認定、外来語であるとしてそれが何語からの由来であるかその原籍の認定、借用語とは言ってもそれがその言語にどの程度定着しているか、あるいは単に一時的な使用にすぎないのではないかの問題、など、さまざまである。

例えば上記のうち、*víntsi* は Proias の辞書には英語由来とあるが、Mega Lexikon (Demetrakis の大辞典) にはイタリア語由来とあり、また *resital* は、Proias, Mega Lexikon とともにフランス語由来と記してある。辞書によって判定は必ずしも一致しない。従って前記の現代ギリシア語における外来語の数も決してそのまゝのみにしてしまうことはできないのである。

V

なお、現代ギリシア語と言ってもそれは時間的にかなりの幅をもっている。この間、外来語が使用される状況には当然小さくない推移変化があったはずである。きわめて部分的な調査ながら私が先年扱った材料からでもそのことは窺えるのであって、15, 16, 17 世紀には外来語と言えは主としてラテン語であり、トルコ語は（少くとも文書語の中では）18 世紀になって急増する。そして 19 世紀以降、西欧語からの借用語が次々に目立ってくるのである。その中にあって英語は他よりおくられている。英語はギリシア語において新参の借用語なのである。

外来語の使用は、言語の位相によって、また個人によって、あるいは表現の形式や内容によっても、かなりのちがひがある。現代ギリシア語には、民衆語といわれる一種の口語と、純正語と呼ばれる一種の文語とがあって、その差は語彙のみならず文法や発音の上にまで及んでいるが、この二つの言語形（民衆語と純正語）の相違の大きい要素として外来語の存否が考えられる。純正語では外来語は余り見られないが、民衆語では外来語が多い。このことはつまり日常的な言語においては外来語の使われ方が多いということを示している。

外来語の使用は、新聞ではその欄の性質や記事の内容で異なり、作家で言えばその作家の個性や作品の内容によっても違ってくる。なお、現代ギリシア語の語彙の 22.5% が外来語である（ということをもそのまま信用する）としても、実際の表現生活における外来語の使用率はそれ

ほど高くはないということも留意しておく必要がある。

VI

問題はさまざまあるが、ここで述べることはできないので、最後に、本誌本号に岡野純氏が訳出したカラガーツィスの「マンダリンのボタン」の原文中に出てくる英語からの借用語（と考えられるもの）を掲げることにする。次の6語である。

džaz	< jazz	「ジャズ」
koktél	< cock-tail	「カクテル」
uíski	< whisky	「ウィスキー」
džín	< gin	「ジン」(酒の名)
sinema	< cinema	「映画」
soda-ghuóters	< soda-waters	「ソーダ水」

このうち、はじめの3語はAndriotesの辞書にある語であるが、あとの3語はそこにはない。ProiasとMega Lexikonについて見ると、džínがMega Lexikonにあるだけである。また新しい語を豊富にふくむNeon Orthographikon Ermeneutikon Lexikonを見て、džínだけしか見当たらない。このさわめてささやかな観察から何らかの推断を下すことはもとよりはなほ危険であるとしても、しかしAndriotesの辞書に載っているよりもはるかに数多い英語の語が現に使われているであろう、そしてそれらの中には新しい辞書にもまだ載せられていないものも数々あるであろう。ということは、推論してほぼ誤りのないことではなかろうか。このことは英語を話す国民とその国家の政治的、経済的、文化的な勢力が才2次大戦後のギリシアにかなり強く入りこんで来たという事情によることが多いと思われる。これはまた今日における世界的な現象でもあるのであろう。(ドイツ語における英語の影響—語彙のほか統辞法、形態論、文字などをふくむ—については、B. Carstensen: Englische Einflüsse auf die deutsche Sprache nach 1945が最近出た。言語学研究室にある)

とは言え、こうした英語由来の語彙が果してどの程度ギリシア語の中に定着するかには疑問の余地がある。そもそもギリシア語それ自体が比較的保守的な言語であることではあるし、他のヨーロッパ語からの借用語を凌駕するほどに英語の語彙が今後ギリシア語の中に入ってくるとは思えないのである。

(蒼惶の中に作り上げたので、ほんのメモをつづり合わせたようなものになってしまった。正

シュメール語に於ける アッカド語の借用語について

吉 川 守

は じ め に

シュメール語に言語面での関心を持たない学者、たとえば歴史学者、人類学者、考古学者たちが、シュメール語の借用語について興味を寄せる場合、それは主としてsubstratumの問題に関連している。

なかでも、シュメール地方の地名の来由について、近年、活発な議論がきかれるけれども、アメリカの学会では、これをsubstratumからの継承として推定する傾向が強い(註1)。

地名の問題とは別に、シュメール語の語彙の中からsubstratumの要素を析出しようとする努力も見られるが(註2)、その決定的証拠に欠ける点では、地名の場合と同じである。そのような例として、たとえば、zabar(銅)を挙げることが出来る。この語は、アッカド語にsiparruとして借用され、ヘブライ語にはšēper, アラビア語にはṣifrun, ḡufrunとして継承されている(註3)。F. Borkは、この語とラテン語のcuprum (Kupfer, Copper, Cuivre) とを比較し、A. Salonenは、さらにフツリ語のhijarohheとの比較を試みているが(註4)、このような比較が行われる背景には、zabarをsubstratumからの借用として想定する立場がある。A. Falkensteinは、アッカド語形Siparruから、シュメール語zabarの古形として※sibarを推定しているけれども(註5)、その場合、i > aの母音同化及びs > zの音韻変化が、シュメール語に於いて実際に行ったかどうかは分らない。それは、シュメール語からアッカド語に借用される場合、/z/がそのまま保持される例よりも、むしろ/z/ > /š/の移行が認められる例の方が多く指摘されるからである。(e.g. abzū > apšū (abyss), izkim > iskiṣnu (前兆), az > asu (熊), zimbir > sippar (地名), etc.) 従って、もしzabarをそのままシュメール語に於ける古形と認めるならば、この語は、za(石) — bar₁₁(輝く, etc.)と分析することが出来る(註6)。故に、zabarを一方的にsubstratumからの借用語として断定することは許されない。

substratumに関しては、この他に、I. J. Gelbが、substratumの存在を明証する論拠の一つとして、Graphic evidenceと呼んでいる問題がある(註7)。これは、音